



私たちの食生活を支える神

わたしたちに必要な糧を今日与えてください。
(マタイによる福音書6章11節)

イエス・キリストが教えて下さったこの祈りで、糧(かて)という言葉は原文ではパンになっています。日本人ならお米に置き換えても良いでしょう。要するに、ここで祈っているのは、私たちの毎日の生活を支える最も基本的な食べ物のことなのです。人間にとってこれほど大切に切実な祈りはありません。

日ごとの食べ物のために祈ることと切り離せないのが食前の感謝の祈りです。しかし今の時代、この国では、飢えている人がいる一方でありあまる食べ物を食い散らかして人々も多いのが現状です。皆さんも食べ物のために祈ったり、感謝したりする気持ちがなかなか持てなくなっているかもしれません。

食べ物を巡ってはさまざまな問題がありますが、身近な問題としては食品の安全性のことが大きいでしょう。もしも私たちが、よく考えてみると不安だけど口にするしかない、という思いでいつも食事をしているとしたら、これは大変なことで、こうした暮らしは楽しいはずの毎日の食事を貧しくしてしまうのです。神様によって私たちみんなの食生活が祝福されますように。

当然のことですが、重度の病人を除き、私たちの誰も、毎日何もしないで食事に取り組むことは出来ません。「働かざる者、食うべからず」(第二テサロニケ書3:10)、働くことが出来るのにその意欲を持たない者は食べる権利がないのです。

食べるだけでなく、食べ物を得るために働くことも、人間が人間であるために大切なことであり、両方共に神の導きのもとにあります。私たちは毎日の楽ではない仕事から逃げることなく、そこに積極的にかかわることによって食べ物を手に入れます。しかし食べ物を前に、これは自分の力だけで手に入れたと思わないようにしたいものです。食べ物を得るための労働、家族を養おうと日ごと重

2022年8月発行

ねる心づかい、それは私たちの人間としての生活の基本をなすものです。これを神様が導いて祝福され、主イエスがもっとも大切な祈りの主題として与えて下さったのです。

イエス様はもともと一介の労働者でした。大工である父親を助け、さらに父親の死後は自らの働きで母親や弟・妹を養ったものと思われれます。イエス様は貧しい庶民の生活をけんめいに生きてこられ、その喜びも悲しみも、家族を養うパンを得るためにどれだけ働かなければならないかもよく知っておられました。

イエス様の時代と現代では労働のかたちがずいぶん違うとはいえ、大変さということでは本質的な違いはないでしょう。食べてゆくために、毎日ただただがまんして仕事をするのではなく、どんな仕事であれ、そこに意味と生きがいを見出すことが出来るかどうか、人生をまっとう出来るかどうかの鍵です。(むろんこんなことは皆さんに改めて言うまでもないのですが)。

今日の風潮では、労働時間を出来るだけ短縮し、その分、余暇の時間をつくって生活をエンジョイすることに意味があるとする人が多いです。しかし私たちが人間としてなすべき労苦を重ねてゆくとき、「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる」(詩編126:5)という言葉が事実になるのです。

イエス様は「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」と宣言されました(ヨハネ3:26以下)。神は私たちが必要とするものをすべて用意して下さいます。ご自分の命を犠牲にされ、十字架から全人類に愛を注がれた方、主イエスが命のパンであられます。イエス様は私たちの体に必要なものを与えて下さるだけではありません。私たちの魂になくってはならないものも日々与えて下さるのです。

今日このあと聖餐式が行われますが、どうか私たちの食生活も、そのような、神様のみ前で行う食事としての恵みがありますように。

(2022年7月3日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊